

第2分科会

特別支援教育におけるキャリア教育の意義と展望 ～キャリア教育の視点による教育課程及び授業の充実を目指して～

話題提供者：今野 和則氏（宮城県気仙沼支援学校 校長）
 神田 順子氏（京都市立下京中学校 教諭）
 菊地 一文（国立特別支援教育総合研究所 主任研究員）
指定討論者：渡辺 三枝子氏（立教大学大学院）
 木村 宣孝氏（北海道伊達養護学校 校長）
司会：大崎 博史（国立特別支援教育総合研究所）

第2分科会では、はじめに司会の大崎より、話題提供者等の紹介があり、続いて企画者の菊地より本分科会の趣旨、今回の学習指導要領改訂により教育課程上にキャリア教育が位置づけられたことを踏まえ、キャリア教育の定義及び意義についての理解を図り、今後の教育課程や授業の充実等を含む学校教育の在り方や課題への具体的な対応策について、話題提供などをもとに協議を進めていきたい旨の説明があった。（要項 P39 参照）その後、指定討論者 渡辺三枝子氏よりキャリア教育の定義や意義についての提言があり、続いて上記3名の話題提供者からの報告があった。

渡辺氏からは、議論の出発点としてキャリア教育定義について、解説があった。

続いて話題提供者からの報告があった。菊地からは、「キャリア教育の視点による教育課程及び授業改善のための観点や方法の提案」として、知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階・内容表(試案)」や、授業における観点位置付け・授業改善シート、単元における観点位置付けシート等の提案があった。（以下要項 P40-41 参照）

次に今野氏より、気仙沼支援校における「キャリア教育の視点による教育課程の改善等に向けた取組」として、キャリアの視点による年間指導計画及び教育課程の見直しや、個別の支援計画の充実を目指した「本人の願いシート」の作成、授業における目標分析と共有化等についての報告があった。（要項 P36-37 参照）

神田氏からは京都市下京中学校育成学級における「キャリア教育の視点による授業の充実を目指した取組『ようこそ先輩』」として、特別支援学校高等部との交流及び共同学習等を通じた連携、具体的には卒業生を招き、話を聞くことにより、中学生が自分の進路の展望をもち今後の学びの目標を考えることにつなげるための授業実践の報告等があった。（要項 P38-39 参照）

協議では、はじめに指定討論者の木村氏より、本研究所にてキャリア教育に関する研究に取り組んだ経過についての説明や、キャリア教育の重要性についての話があった。また、今野氏へは PPT 資料 4P の、キャリアの視点による指導計画の見直し後の教員のキャリア教育についての意識の変化について質問があった。神田氏へは「ようこそ先輩」の授業実践後、学級の他の教員からどのような感想があったか、またその後のどんな授業づくりを考えているかについて質問があった。

これに対し今野氏からは、見直しについては高等部では全職員で取り組めたが、小中学部では全員で取り組むまでには至らなかったこと、教員からは「単元によって、位置付けに偏りがあることが分かった」、小中学部からは、「意識していなかったが、キャリア教育について扱っていたことが分かり、安心した」等の意見もあった、等の回答があった。

神田氏からは、「生徒たちは先輩が訪れることを非常に楽しみにしていた。先輩たちや高等部の先生か

らお話を聞くことで、いつもよりしっかりと話を聞き、内容をよく理解していたので驚いた。他の教職員も同様の意見だった。」「この取り組み後、夢やそれに向けての目標が非常に具体的になったので、一人ひとりの目標をどんな形で達成できるか、具体的な方策を生徒と共に考え、取り組みたい。また、『願いシート』を通して支援計画につなげていくことが必要であることを再認識した」との回答があった。

渡辺氏からは、それぞれの報告に対しての感想の後、今野氏へは報告の最後にあった「クラスルームからコミュニティへ」という言葉を挙げた背景について、また教師のキャリアをどう考えるかについて、神田氏へは中学校育成学級と支援学校の高等部のつながりは「振り返り」という課題にどう取り組んでいるかについての質問があった。

今野氏からは、「子どもたちが生活する地域を、ユニバーサルであり、障害者にも優しい地域にしていきたいと考えている」、「本校教員には、学校を離れ通常の学校へ赴任したときに、本校での経験をすばらしいキャリアとして活かしてほしい」という回答があった。

神田氏に代わり白河総合支援学校の学校長森脇氏より、「本校では就労に向けた『出る』という支援を行っている。その中で子どもたちが大きく変わっていき、保護者を始めとした周りも変わり、キメキャリア発達していく。このあたりがキャリア教育のおもしろいところだと感じている。中学との接続についても今後さらに取り組んでいきたい。」との回答があった。また、神田氏からは、「様々な取り組みの中で子どもたちに自分について考えさせてきた。考えたことを再度本人に返し確認していくことも必要だと考え取り上げた」との回答があった。

<質疑>

・質問者：、進学先は白河総合支援学校しかないのか、あるなら、卒業生として白河総合支援学校を取り上げた理由と小学校とのやりとりについて聞きたい。

神田：京都市には職業学科をもつ高等部が2校あるが、職業学科に進まない生徒は、総合制の普通科の総合支援学校に行く。今回は職場実習の話をしてもらうために白河総合支援学校にお願いした。小学校に対しては、年2回小中交流会を持っている。小学生が楽しめるように生徒たちが企画運営し、招待している。また、教職員は小中連絡会のほか、校区の育成学級の教職員が集まり研修会で情報交換を行っている。

・質問者：今野氏に対し、自立活動とキャリア教育の関連について尋ねたい。

今野：特に関連づけて行うまでは至っていないが、今後検討していきたい。

・質問者：小中学部の教員がキャリア段階内容表の見直しで、どのような点でキャリア教育を行っていると感じたのか、今野氏に聞きたい。

今野：見直しの中で、実際に作業をしたこと、点数化したことで分かったのだと思う。頭の中で考えているだけでは分からなかったと思う。

菊地：授業改善シートを使って実際チェックすることや、高等部の先生も入って小中でチェックすると縦のつながりが見えてくること等が、他の実践校から報告されている。

・質問者：我が校でも現在授業改善シートを使い、全教員でチェックしているところであるが、障害の重い子どもでは発達段階表のチェックに偏りが出る。大切にすべき点等再度教えていただきたい。

渡辺：4能力表は先生方が行っている活動を全て書き込んで作ったもので、例文は通常の学級の子どものを対象にしており、障害の重い子どもについては挙げていない。今後各学校が子どもの活動を記入しながら、どこに重点を置きたいか等を検討し作り上げてほしい。我々の仕事は、具体から抽象へ、簡単なことから難しいことへ積み重ねていくことであるので、積み重ねを大切にしてほしい。

菊地：キャリア発達段階・内容表については、現在改訂を進めているところであり、障害の重いお子

さんについても適用できるようにしている。

<まとめ>

木村氏：子どものキャリア発達を，また子どもが活動する意義を子ども自身が深めていけるよう，人的，心理的に支援することが大切。これは自立活動の目的と同じと考える。4能力とは，**ability**ではなく**competency**と捉えており，「育成」の姿勢がある。この考え方であれば，障害の重さに関係ないと思う。

渡辺氏：キャリア教育というのは，経験を積み重ねた先生方のキャリアを活かすということも含む。誰か一人ががんばるのではなく，経験を分かち合い，学校全体で取り組んでほしいし，学校教育の現代的意味を再度考えてほしい。学校教育は今まさに社会で大きな意味があり，先生方はそのプロである。子どもの可能性を育て，社会を変えるような取り組みをしてほしい。